

多彩に生命尊重精神を交流



いのちの灯の集い

NPO法人輝けいのち ネットワークとNPO法人深澤晟雄の会の主催による「いのちの灯の集い2017」は11月19日太田老人福祉センターで開かれました。

今年、深澤晟雄村長が就任して生命尊重行政発足60周年と両NPO法人とも結成10周年を迎えて、その記念行事ともなりました。

同日は町民を中心に県内外含めて約80人が集いました。県外で遠くは九州の福岡、関西は大阪、岡山などから参加して「生命尊重の交流」を深めました。

みちのくみどり学園による野岳太鼓で開会した集いは、いのちの灯文化賞贈呈式で始まりました。今年、深澤晟雄村長が就任して生命尊重行政発足60周年と両NPO法人とも結成10周年を迎えて、その記念行事ともなりました。

県内外と町民80人が参加して生命尊重精神の交流を深めた「いのちの灯の集い」

出家の大峰順二さんに文化賞が贈られました。記念行事では両NPO法人10周年に当たり各法人から「10年の歩み」が報告されました。また「いのちの継承を語る」では、大

文化賞受賞者 生など6人から「生命尊重の継承活動」が発表されました。

井上寿美准教授と就実短期大学の笹倉千佳弘教授による「西和賀の社会的養護の実践に関する考察」と題して施設の子どもをホームステイさせる沢内の地域性を調査研究してきた成果を紹介しました。そして、みちのくみどり学園の県立紫波総合高校3年の柿木朱音さんは「私とホームステイ」と題して沢内のホームステイ体験を

資料館 12月から冬期休館

深澤晟雄資料館は12月より、職員不在の場合は自動的に資料館米澤事務局長の携帯電話に転送され、電話対応できます。冬期は資料館入口除雪も必要で早めの予約をお願いします。

今こそいのち輝く社会実現の活動を ～いのちの灯の集いアピール～

いのちの灯の集い2017アピールは「深澤村長の理念『いのちの尊さ』を今こそ訴え、すべての人々のいのち輝く社会実現に活動してい

く」と採択したアピール全文を紹介します。写真はすでにアピールを具現化して、いのちの灯文化賞を受賞する大峰順二さん（右）



深澤晟雄さんが沢内村長に就任し「生命尊重行政」を始めたのは1957（昭和32）年です。今年が60周年ということになります。

全国初となる老人医療費無料化を実施したのは1960（昭和35）年です。当時貧困にあえぐ村民にとって最も所望されている施策でしたが、国や県は法律違反を理由に制度導入に難色を示しました。しかし、深澤晟雄村長は憲法の生存権を主張して、この施策を断行しました。この時の「国は必ず後からついて

くる」という深澤村長の言葉通り老人医療費無料化はその後東京都をはじめ全国の自治体に波及し、1973（昭和48）年には、ついに国の制度にもなりました。小さな一寒村で始められた施策が国を動かしたのです。しかし、1983（昭和58）年の老人保健法施行により、事実上有料化されていく中で、沢内村では地域住民による無料化継続の運動が沸き上がり、村議会においてもこれを採択され、無料化が堅持されることになりました。

この沢内村の姿勢を支持、支援する全国の人たちの呼びかけで「老人医療費無料化発祥の地の記念碑・いのちの灯」が建立されました。1983（昭和58）年12月1日、全国各地から参加者が集い、記念碑の除幕式が行われました。現在の「いのちの灯の集い」は、こうした経緯があって行われています。

最近では、記念碑建立25周年、老人・乳児医療費無料化50周年、乳児死亡率ゼロ達成50周年などを記念して開催しています。来年は記念碑建立35周年を迎えます。

今年「深澤晟雄の会」「輝けいのちネットワーク」とともに設立10周年を迎えました。両NPO法人とも生命尊重の理念を学び、継承し、今の時代に生かす取り組みを続けています。

しかし、現実の社会は、児童の虐待が12万件を超えています。十分に食事をとれない子どもに対する「子ども食堂」のニーズが増えています。高齢者の孤独死や介護難民が増加しています。低所得者が増え、生活保護世帯が過去最高の164万世帯になっています。格差がどんどん広がっており、声を上げられない子どもや障がい者、高齢者にとっては受難の時代と言っても過言でない状況になっています。

生命尊重行政60周年に当たり、深澤晟雄村長が唱えてきた「いのちの尊さ、大切さ」を今こそ社会に訴えるときともに、私たち自身も「すべての人々のいのちが輝く」社会実現のためともに手を携え、ともに活動していくことを決意するものです。

2017年11月19日

いのちの灯の集い参加者一同